

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ホワイトヘッドにおける教育：「愛と正義」 をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 誠作 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006357

ホワイトヘッドにおける教育

—「愛と正義」をめぐる—

山本 誠 作

(一)

ホワイトヘッドは、愛と正義という両観念の関係について、彼の諸著作の何処にも言及してはいないように思われる。にもかかわらず、こうしたテーマをここに掲げたのは、それがホワイトヘッドにおける「教育」という問題を論議するにあたって、適切なものと考えられるからである。周知のように、ホワイトヘッドは『観念の冒険』のなかで、古代ギリシアに始まる人類史における諸観念の展開を冒険的にかつ精緻に追求している。私も、あくまでもホワイトヘッドの思考の枠内において、愛と正義の関係について、観念の冒険を試みたいと思う。

ここでさしあたってまず注意を喚起したいのは、ヘブライ的キリスト教的神が、「愛と正義」によって性格づけられることである。したがって、これは、キリスト教神学において、終始最も重要なテーマの一つになっている。しかしホワイトヘッドはキリスト教的神のうち、セム族の専制君主的要素が混入していることに対して、徹底的な拒否の態度を持っている。そして専制君主的神を「かつて想像しえた最も不道徳な神の一つ」(『ホワイトヘッドとの対話』ルシアン・プライス、岡田雅勝・藤本隆志訳、みすず書房、127ページ)と公言し、さらに語を継いで、「キリスト教徒の神学が人類の大きな災いの一つ」(同上、250ページ)とまで激しい言葉で糾弾している。こうしたホワイトヘッドのキリスト教神学への態度を考慮に入れるとすれば、当面の「愛と正義」の問題を論じるにあたって、私はキリスト教神学思想を考慮の外においても、差し支えないと思う。

ただそうはいっても、愛と正義という両観念を相互に矛盾したものとしてとり扱うキリスト教神学の立場は、無視することはできない。そしてこうしたキリスト教的考え方は、ホワイトヘッドの思考の枠組みにおいて、換骨奪胎されて、両観念はコントラストにおいてあるものとして捉えられるのではないかと思う。キリスト教神学がなぜ愛と正義を相矛盾したものと考え

るかといえば、その理由はこうである。つまり、愛とは、神は正しい人にも正しくない人にも、太陽の恵みを等しく与えたもうという聖句によって適切に表現される一方、正義とは、正と不正とを厳密に区別した上で、正しい人には報償を、正しくない人には処罰を与える公平さと結びついて考えられるからである。

ところで、愛ということが私が念頭に思い浮かべているのは、われわれが全体的なものに結びついているところに成立する、喜びとか気遣い（care）と一つに考えられる感情である。他方において正義とは、知性によって立てられる法とか規則に基づいて成立する、人間関係のみならず、国と国との社会関係をも支配する、正しいとか正しくないといった秩序と結びついてい。したがって、愛と正義とは、結局のところ、感情と知性との関係と相関的に成立している、といて差し支えないと思われる。

愛を上述のように定義できるとすると、それはキリスト教的なアガペーというよりも、むしろ仏教的な、縁起の理法にしたがって、どんなものをとっても他の全てのものと相依の関係にあるものとしての、同苦同悲の立場により近い感情と考えられる。そして愛がさらに気遣い（care）とも一つに結びついているとすると、それはわれわれにハイデッガーが、人間が世界におかれてあれこれのものと関わってあるとする現存在（Dasein）の構造全体性を Sorge、つまり Care として規定した実存哲学をも想起させるのである。永見勇教授は『生きがい喪失とケアの哲学』のなかで、ケアを「癒し」と定義し、こう述べている。「ケアとは心配、不安、関心、あるいは苦悩や悲しみを感じつつ生きている人（人びと）と、配慮、憂慮、留意、用心、保護、監督、世話といった態度で関係する人（人びと）との相互の関係性の中で見られる様々な癒しの営みである」と（『生きがい喪失とケアの哲学』、ハーベスト社、112ページ）。

このように考えると、ケアとは多義的観念ではあるが、当面の主題である愛は、こうしたケアと結びついたものとして捉えることが、適切ではないかと考える。

愛と正義とを以上のように規定した上で、両者はホワイトヘッドの思考の枠組みにおいて、どのように関係するかに関して敢えて「観念の冒険」を試みるとすると、愛と正義とはコントラストにおいて調和統一するものとして関係付けられる、とするのが私の論旨の結論である。そして両者のこうした関係は、「情的知」の立場において初めて成立するものとして捉えられる。そしてもし知性が情的なものとの結びつきから抽象されて、それ自身自立するものとなれば、それは知性主義と呼ばれる。

知性主義の立場においては、正義もまた、愛との結びつきから断ち切られて、それ自身、知性に基づく、自立的なものとして立てられてくるのである。私はこうした正義観をコールバーグの道徳性発達論の諸段階説のなかに垣間見ることが出来るのではないかと思う。しかしそれはホワイトヘッドの考えからは逸脱したものを見なさざるをえないのである。こうした論点を以下において、もうすこし明らかにしたいと思う。そのためには、ホワイトヘッドの知覚論に窺い

知られる「情的知」と呼んでもよいような立場を明確にしなければならない。

(二)

actual entity は「経験の主体」といわれる。しかしそれはもっと厳密にいうと、感じ-考え-行為する主体でもある。まず、こうした論点を、もうすこと敷衍してみよう。

actual entity は「それ自身の世界」に置かれて、それと関わりつつある。ホワイトヘッドは、こうした全体的なものとの関わりを積極的な物的抱握 (positive physical prehension) と言う。そしてそれを感じ (feeling) と同一視している。actual entity はこういう仕方、既に与えられた物的 (physical) なものを感じ取り——別言すれば、physical なものによって因果的に限定されながら (ホワイトヘッドは、知覚論では、actual entity のこうした被限定的在り方を因果的効果の仕方における知覚 [perception in the mode of causal efficacy] と呼んでいる) ——そこに例示された観念的なもの (real potential) を自らへと受容すると同時に、そこにそのつど (on the spot) 介入してくる神——神の原初性 (primordial nature of God)——から導き出されてくる第2次的な観念的なものを自らのうちへと受容する。そしてそこに actual entity の諸観念を知覚し操作する知性的 (intellectual) な在り方が成立するが、ホワイトヘッドはこうした在り方を知覚論では、現示的直接性の仕方における知覚 (perception in the mode of presentational immediacy) と呼んでいる。これら二つの様式における知覚形態はさらに象徴的連関の仕方における知覚 (perception in the mode of symbolic reference) によって総合統一されて、通常われわれがものを知覚する働きが成立する。そこには三角形をした知覚構造がある。

ホワイトヘッドの知覚論を特徴付けるこうした三角形は、『教育の目的』ではロマンス-精密化-総合化に於いて、『観念の冒険』では、本能-知性-知恵の三者関係において捉えられている。ここで本能というのは、過去の慣習的なものに従う人間の経験の原初相を意味している。彼は過去に対する「本能の適応」を話題にしている (『観念の冒険』、菱木、山本訳、松籟社、66ページ)。本能と知性とを総合するのが、知恵である。「本能を知性と合生させていく様態を決める決断と言うものがある。この要因を私は〈知恵〉と呼ぶことにする」(同上、63ページ)。ホワイトヘッドは知恵の立場から、知性主義 (intellectualism) に基づく「単なる知識」という観念をわれわれの心から追放すべき高度な抽象だ、と主張する。そして知識はいつでも「情緒や目的という付随物がついている」(同上、5ページ)と述べている。本能と知性が知恵によって総合されることによって初めて、われわれは全体から部分へ、部分から全体へと展開する生命のリズミカルな躍動に参入し、それを捉えることができる (同上、64ページ)。ホワイトヘッドはプライスとの対話の中で、知性と情緒の関係に言及し、こう述べている。「知性と情緒の関係は衣服と身体の関係のようなものです。われわれは衣服なしでは文明生活をう

まくやっていくことができないかもしれませんが、われわれに衣服だけあって身体がないとしたら、ずいぶん変なことになるでしょうね」と(同上、332-3ページ)。

要するに、情的なものが知性的なものに先立つのであり、そして前者から後者が導きだされるという仕方、両者が総合統一されるのである。それは「情的知」と呼んで差し支えないと思われる。知覚論でいえば現示的直接性 (presentational immediacy) はいつでも因果的効果 (causal efficacy) に先立たれる。これが「眼でもって見る」という文言で、彼が意味しようとすることである。しかし視覚の場合には、「眼でもって」という文言で描写される身体的機関がしばしば忘れ去られて、見られたもののみが特にクローズ・アップされる傾向がある。ここで身体的機関は、知覚者の身体と切り離しては考えられないことは、いうまでもないことであるが、身体はまた、ホワイトヘッドの思想の文脈においては、われわれがそのつど、そこに置かれている世界と深い係わりにおいてあるものとして捉えられているのである。したがって、「眼でもって」ということは、さしあたってまず、actual entity がその置かれた現実的世界によって限定されてあるという在り方が意味されているのである。そしてこうした在り方は、先に因果的効果という仕方の知覚という言い回しで指示された事柄である。しかしこうした知覚形態がわれわれの経験から捨象されるとそこに見るものと見られるもの——つまり、主と客——との対立関係において事物を捉える知性主義 (intellectualism) が成立してくる。こうした intellectualism は科学知識の成立の基礎と考えられ、そして科学知識に基づいて、科学技術が拡大してくるのであるが、ホワイトヘッドは intellectualism の立場は、単純に位置を占める (simple location) とか具体性を置き違える (misplaced concreteness) といった誤謬に付きまといわれた主観的原理 (subjectivist principle) として批判している。

actual entity は感じ考える主体であるだけではない。それは同時に、行為する主体でもある。ホワイトヘッドの思想のコンテクストに則していうと、actual entity は physical なものを自らのうちへと受容しながら、未来に目的観念を措定することによって、こうした目的観念を、物的 (physical) なものと概念的 (conceptual) なものとを統合にもたらずという仕方、実現しようとする行為する主体でもあるのである。actual entity は感じ-考え-行為する主体として全人であり、そして全人として全体的なものに関わっているのである。

(三)

ホワイトヘッドは「情的知」という用語法を何処にも使用していない。しかしそれをいろいろな箇所ですれすれ示唆している。たとえば、『理性の機能・象徴作用』では、「〈理性〉の機能とは生命の技巧を助長すること」(著作集第八巻、藤川・市井訳、8ページ)と述べている。この場合、生命とは、「過去から派生し未来を目的とした情緒の享受である」(『思考の諸

様態』、藤川・伊藤訳、204ページ)。理性の機能が、こうした生命の技巧 (art of life) を助長することであるとすれば、ここで話題になっている理性は、いわゆる intellectualism の立場とは区別されなければならないと思われる。何故なら、後者は要素還元主義として性格付けられるのであり、そこでは生命的なものとか動的なものは、諸要素の単なる総和として捉えられて死んだものと見なされるがゆえに、こうした知性主義に基づく理性はとうてい「生命の技巧を助長する」などとはいえないからである。

さきに、actual entity は人間がそのつど全人として全体的なものに関わりそれと結びついている在り方だといったが、こうした在り方は、愛とか喜びとかケアといった観念によって描写される。ホワイトヘッドは『観念の冒険』で文明論を展開している。そこで彼は、真、美、芸術、冒険という四つの性質ないし価値を総括する「調和の調和」の観念を捜し求めながら、「優しさ」とか「愛」を話題にしている。しかし彼の見解では、優しさとか愛はこうした役目を果たす観念としては狭すぎると述べ、結局のところ、「平安」(peace) という観念がそれにもっとも相応しいものとしてそれに白羽の矢をたてている (前出、393ページ)。

ところで、情的知という言い回しによって意味されているのは、結局のところ、人間の経験の原初相は情的なものだという主張である。人間はさしあたってまず、こうした情的な立場で全体的なもの、つまり世界に触れている。言い換えると、世界に置かれて、それによって限定されている。ホワイトヘッドはこうした仕方の被限定性を物的抱握と呼び、そして物的抱握を自らの経験のうちに受容する積極的な物的抱握を情的 (emotional) な性格を持った感じ (feeling) と同一視している。こうしてホワイトヘッドによれば、人間の経験の原初相は情的なものであり、そして知性の働きは、こうした情的なものから導き出されてくるのである。actual entity が物的極と心的 (概念的) 極からなつているといわれる理由もそこにある。こうして actual entity は、自らのそのつどの経験において物的なものと心的なもの、つまり、多を一へと統合するプロセスとして成立する。そこに初めて、感じ-考え-行為する経験の主体としての actual entity の在り方があるのである。したがって、情的知においては、物的なものと心的なものとはコントラストにおいて調和統一されているといっても差し支えないであろう。物的なものと心的なものとの調和統一は、ホワイトヘッドの文明論での用語法を使用していえば、自然性と人為性との調和統一にほかならないであろう。彼は後者を「真的美」という価値として記述しており、そしてそれは社会において実現されるものと見なされているが、しかし厳密にいえば、こうした価値は、同時に、actual entity が世界に置かれて、それによって限定されながら自らを限定するそのつど、そこに実現されているといわなければならない。

「真的美」という価値は、「現象の实在に対する目的論的適応」において成立するのであり、そこでは、naturalness と artificiality とはコントラストにおいて調和統一されている。この真的美の価値を自己のために享受するのが芸術であり、他者のために享受するのが冒険であり、

そしてそれを全体のために享受するのが平安である。そして真と美とのコントラストにもとづく調和統一としての真的美の価値を実現するのが、「情的知」だというのが、私の主張である。

(四)

愛と正義もホワイトヘッドの思想のコンテクストにおいては、コントラストにもとづく調和統一として考えられるのではないであろうか。愛と正義とは対立しているにもかかわらず、正義は愛を予想し、愛は正義において自らを実現する。さもなければ、一方において、愛はいわゆる溺愛とか、あるいは常軌を逸した感情の奔放な発露である激情主義にはしるであろうし、他方において、正義は、冷徹で人情の機微を解さない厳格で形式的で拘子定規な律法主義に陥るであろうと思われる。

ところで、情的なものから知性的なものが抽象されると、intellectualism の立場が成立することは先に述べたが、こうした intellectualism では正義を愛と切り離して考えようとする。それがコールバーグの道德性の発達諸段階説であるように、思われる。彼は道德性の発達の最高の第六段階に公平さとしての正義を位置づけている。こうした正義は教育論においても、極めて重要な徳目とか価値とかんがえられる。コールバーグの論旨に対して、それはあまりにも男性中心的な偏見であり、女性の愛とかケアといった優しさの感情を全く無視しているとの批判が、女性研究者をはじめ多くの人から提出された。彼並びに彼の賛同者たちは、こうした批判を吟味した結果、それを正当なものとして受入れた。結局のところ、愛とかケアといった情緒は正義を越えたものとして、第七段階に位置づけられてくる。そしてこうした情緒は決して女性特有なものではなく、男性にも認められるものと考えられてくるのである。がしかし、公平さとしての正義が全ての人間に妥当する普遍主義的關係であるに反して、愛とかケアは特定の人間関係にのみ適応される個別主義的關係と考えられている (L. コールバーグ、C. レバイン、A. ヒューアー、『道德性の発達段階』、新曜社32ページ)。こうしたことは、コールバーグの正義論が飽くまでも知性主義の立場で立てられている証拠である。われわれがホワイトヘッドの思想に則して考えようとしているように、もし正義が、それ自身で立つのではなく、それに先立つもっと広範な愛の感情から導かれるものと考えたとすれば、コールバーグの正義論は根本的な批判を免れえないであろう。

R. カーターはその著作 *Becoming Bamboo* (邦訳『東西文化共生論』、山本訳、世界思想社)の中で、ホワイトヘッドの所論とは別に、ケアと正義のコントラストにもとづく調和統一について、次のように述べているので、それを最後に引用してみたい。「われわれの時代は、正義、弁護士、規則にあまりにも比重がかかりすぎている時代であり、断然、〈男性的な〉秩序と公平さの感覚の時代である。それははっきりと、男性が気遣い、慈しみ、その近隣に住するとい

う感覚を維持したりするように鼓舞されない時代である。しかしケアを欠いた〈正義〉は、不正たらざるをえず、そして今日、焦眉の道徳的処方箋は、正義とケアとの間の不均衡を修正し、両者間の緊張を回復するために、ケアならびに他者との感情移入的一体化の薬を一時的に過度に投与する事ではなければならない」(160ページ)。